

末黒野

すぐろの



7月号

（通巻899号）

山笑ふ

森清堯

下萌やまだ硬き風すべらせて
鶯や切れぎれの譜を調へて
敷石の窪みになじみ落椿
浮雲の影置く富士やうららけし
争へる鴉と鳶山笑ふ
こでまりや里の朝日をたつぷりと
川沿ひの風のふくらみ花吹雪
雲重くかかれる千木や八重桜
隠沼へ影を重たく春の月
桜朶降る線画めきたる石畳
風止んで配色を知る風車
永き日の名残のひかり名の木の秀

しやぼん玉

岡野里子

弓形に歩む渚や春の風
花菜風小暗き小屋に鳴く仔牛
大き耳ぴくりと仔牛風光る
幼子のことばはポエムしやぼん玉
花便り薄埃せる旅かばん
魁けて華やぐ若木朝桜
城門の乳鋌てらてら若桜
水湛ふ竹の切株匂鳥
青銅の反り屋根覆ふ桜かな
小流れに火色を落とし藪椿
十二単袴に猫の深眠り
寄る波の引く波呑みぬ春汀

日永

黒滝志麻子

(顧問)

引明けの雲を払ふや楓の芽
 をちこちの雨の色なる桜かな
 木の影へ来る鳥の影日の永き
 初蝶の止るとも見え水飲み場
 雪柳触れて行きたる男の子
 小綬鶏の声打つ雨戸白み初む
 海よりの風強き径松の芯
 木造りの駅舎に降りぬ華鬘草

甲矢集

配列は音順(月毎の循環)



病日録

田中臥石

海の風匂へり庭の紅椿
 白躑躅庭を潮風渡りけり
 菜の花の大多喜は雨霽れにけり
 大多喜城枝垂桜を透かし見ゆ
 日出づる太平洋の霞みけり
 太東の岬や鯨のさびき釣
 磯釣の波へひらひら崖桜
 筍を買ひて帰りの房総路
 蜜蜂の羽音ひととき白つつじ
 誕生日とは言へ雨の針槐

花曇

森清信子

内裏雖半世紀経て無垢のまま
異人館へ向くるカンバス花ミモザ
吐く息の豊かに長し紅枝垂
パンケーキすべるバターや花曇
囁や寝足りしはずが床の中
春愁や幾度となく拭く眼鏡
つばくちや元町裏にかけはぎ屋
攫ひゆく海の群青春嵐
おはやうと巢燕に声通学児
無音なる深き蒼天松の芯

花大樹

菅野日出子

六人のはらからは逝き彼岸入
杖にたよる齡となりぬ彼岸寺
亀鳴くや自分史と言ふ嘘まこと
四月馬鹿マスクの隠す齡かな
道かへて旧家の庭の花万朶
花木園の池へ迫り出す花大樹
蒼天へ丈を競ひて松の花
立錐の余地なく育ち竹の秋
白木蓮を囲むベンチや鳩の群
怖ごはと齒医者椅子や窓の花

乙矢集

配列は音順、月毎の循環



花吹雪 堺昌子

馥郁と梅のかをりの御成門
梅かをる好文亭の檜皮葺き
乳恋うて啼ける仔羊花吹雪
風にとぶ牛の唾液や散るさくら
うなじより背筋をつたふ花の冷え
長谷寺の磴にひと息花の風
菜の花に見えて影置く紋黄蝶

春の鳶 齊藤マキ子

流鶯 高木邦雄

屑籠のあふれやすしや春愁
あたたかや今日為すことを為し終へて
風船のひも握り締め熟睡の子
浪しぶき被り石蓴のみどり濃し
湘南の風引きしぼり春の鳶
ピザ生地 of 焦げ目香ばし謝肉祭
気紛れにひとり遅日の多摩古墳

籠り居の夕餉の卓や花菜漬
春の宵母郷の酒を久々に
堰に来てなだれ落つるや花筏
佇めば初音幽けし心字池
花木五倍子の一つ揺るるや皆揺れて
流鶯の一声ありぬ峡の黙
雨あがり日に珊珊と芽吹山

春の午後

長尾タイ

名利の猿の曲芸のどけしや
鱈東風埠頭に白き飛鳥Ⅱ
梳る芽吹きの上枝雲流る
囀や一途の恋を蒼天へ
桜東風奉納絵馬の母の文字
花の冷え埒なき会話弾みけり
子雀と分かつおにぎり一人来て

鐘 臙

今村千年

バスを待ち波郷の春を目の当り
養花天ゆつくりと来る夕間暮れ
東風吹くや放生池の鯉浮きて
鈴懸の花の通ひ路時計台
寺々の寺町通り鐘臙
諸葛菜うす紫の園となる
句友及川照子さんを悼む
恵方へのひとすぢの道通りやんせ

壺中の天

岡田史女

潮騒の丘のホテルや桜舞ふ
寝ころべば壺中の天や花の昼
投錨の船の数多や春霞
花筏東京湾へ海峡へ
少年の声ソプラノや緑立つ
表札に父の名いまも朧月
鈴懸の花や港へ続く道

ダミア

小田嶋野笛

月の湖を探してゐるや初蛙
まなうらに光あふるる大朝寝
雪解の村へまた来る救急車
春荒や這這のぼる女坂
ひと文字も読めぬ碑花巡り
声低きダミアよ白き日曜日
登校の途絶え囀さかななる

春

田

大川

暉

記念号の俳誌を繰りて春炬燵
入彼岸の香煙ゆらぐ父母あ墓
濁りなき春田や雲の影走り
天地の闇ふくらませ蛙鳴く
一鍬に願ひこめたり芋植うる
菩提寺の風遊ばせて紅枝垂
八重桜空の余白の真青なり

春の咳

太田良一

散る花の寺が終点人力車
難聴の耳に厨の春の咳
山越せば里は菜の花日和かな
廃駅に残る機関車揚雲雀
補聴器のつかむ雨音春愁
目薬の一滴ほどや白子の目
一炊の夢をまた見る朝寝かな

落

花

加藤静江

ひとひらも落花のうちや大手門
春昼や熟寝の猫の脚長し
満月の磴踏みしめて万灯日
寺裏の抜け道に聴く初音かな
帆船の帆のたたまる雲雀東風
影増すや膨らむごとく芽吹く山
春の池冠羽のなびく鷺一羽



青炎集

森清堯選



横浜 布施由岐子

あの日のこと思ひ出せよと春の地震
春の杜の黙を切りけりチェーンソー
木洩れ日の径よ未熟の鶯よ
杉のあと黄水仙植う村おこし
露天風呂は一人一船夕霞
両の乳に子山羊の背伸び春深き

大網白里 亀卦川菊枝

陽炎を出で蜿蜒と貨車の列
明日は明日ともあれ今日は花人に
細流をわたるや隣り町の春
杖を手に寧らふ夫や夕蛙
山桜うらうらど照る谷田かな
しやぼん玉こはれて消ゆるまでの夢

横浜 東小蘭美千代

猫の恋好きも嫌ひも女偏
濡れ縁の猫の足跡春の泥
肩車の稚児高笑ひ花の昼
町川の流れゆるやか糸柳
囀やたぶの木四方に枝ひろげ
澁刺と岬廻駆くる春の駒

横浜 武田ナオミ

針持たぬ月日の長し針供養
寒き春珈琲豆は深煎りに
春日和画材抱へて日暮まで
刃毀れの刃先を研ぐや黒眼張
裏道の狭きに群れて百磁草
春日和鳩に揃ひのラメ模様

横浜 竹内涼子

遠桜朝の玉子の黄身二つ
四阿に野猫も集ひ夕桜
子ら去りてふらここ昏るるばかりかな
桃の花隠れん坊のおんど見せ
朧夜の青き灯はるか観覧車
里山の鴉声の頻り霾ぐもり

横浜 大霜朔朗

遊休地の土筆千本見向かれず
春の夜や廃棄ためらふ文庫本
満潮位記して岸に花筏
沈黙のピアノの上や春の塵
半鐘の用無く立つや春疾風
顔までも動員の手話春の宵

横浜 森一枝

沈丁花香にもこだはる事ありて
雲速しメタセコイアの木の芽時
故郷は杏の花に埋もれけり
花蘇枋の紅き滴や雨上り
鯉の餌をついとさらひぬ残る鴨
桜薬降る廢校の記念碑へ

横浜 上月智子

操れぬスマホパソコンよなぐもり
蒲公英の紫のきらめく日照雨かな
園芸店の要の大樹百千鳥
芽柳や濠に漣絶え間なく
差し潮に密となりけり花筏
春筍や翁の鋏の黒光り

横浜 谷貝美世

三ツ池の標準木や花五輪
ひと枝は密に咲く花鳥の声
落花舞ふ試合に負けし子の上に
風光るふる里の田も山畑も
鳥声とまがふ鳴き声墓の恋
川風に散るさまなるや踊子草

横浜 小倉純

尾根道の岩に坐しをり山笑ふ
隠沼の主の替はりぬ残る鴨
迦上待つ堰下の稚魚春の川
御題目の洩るる大寺花の散る
春眠やラジオの流すクラシック
停まりのなき囀や四半刻

耕 土 集

岡野 里子



迷ひ込み蜂照明を旋回す
水門に不動の鷺や春日差
入場の右手右足卒園児
庭先もどの道行くも躑躅かな
惜春や畏友の俳句読返し

横浜 大庭美智代

庭の端をいとは染めたり諸葛菜
花冷えやスプーンを洗ふ水しづき
夕日さす樹々を覆ひてかかり藤
しやぼん玉泣きし幼の笑みもどり
若き姪こつと逝きけり春の雨

横浜 白居 澄子

下町や垣根隠れの夜の梅
銭湯の牛乳ごくり夜半の春
旧友に出合へる夜やヒヤシンス
卒業やホワイトデーの倍返し
春の夜や溜息二つ嘘一つ

横浜 松川 昌義

菜の花や音軽やかに耕運機
せせらぎへ枝垂るる花の影清か
往く道も振り向く道も桜かな
霧や抱へしままの旅心
花散るやベンチに小さきヘルメット

葉山 伊藤 美緒

旭光にうごめく魚影水温む
大空へ楔打つやに雁帰る
木の芽和もう一本の酔心地
電車ごっこ出発駅は庭桜
一徹に生きて悔いなし葱坊主

横浜 森川 享

鉢割つて根付ける松の緑かな
霧や丘の風車のたゆみなく
白鳥や引くとき声の極まりて
保存さるる土蔵の町や黄水仙
ゆくりなく閉ぢたる御苑飛花落花

横浜 小林 拓路

スイートピー植うる男の優しき手
どの窓も物語あり春の月
父植えし花や小枝を仏壇へ
春耕や鋤持つ母の足遣ひ
主役には大きき足りぬ目刺かな

横濱 森 由佳

チューリップ描き終へぬ間に五分開き
四月来や胸の門開け放ち
一湾を臨む桜や海に散る
ありたけの景色眼に春惜しむ
永き日や気儘に降るバスの旅

横浜 喜田 君江

石塊のすき間や白き鼓草
子らの落書残る路地裏春の夕
朝の日や今し主役の君子蘭
この景の亡夫に届け飛花落花
麗らかやロープウェイの試運転

横浜 鈴木千恵子

うぐひすの声高きあり低きあり
囀の止むや一羽の飛び立ちぬ
古民家の白木蓮や風の中
卒寿過ぎの叔母のダンスやうらうけし
朱の色の濃し燦として君子蘭

横浜 毛利 直子

朝東風や声出して読む龍太の句
沈丁花香りのしるき露地の暮
幹太き盆梅の向き変へにけり
傍に龍太句集や春灯
猫柳護岸工事のぬかりなく

新潟 太田チエ子

眼裏に君とめぐりし滝桜
持つ我と共に古りたり春日傘
沢水や山葵田覆ふ黒き布
名の知らぬ鳥の鳴き交ひ春の雲
患ひて桜の開花耳に留め

横浜 佐々木澄子

一筋の飛行機雲や春の空
湾望む寺の庵や草の餅
駅弁に旅の気分や春の昼
娘等と弾む会話や春炬燵
直売所にひと束残る花菜かな

横浜 杉山くみ子

嘴合す雀の番春なれや
白椿小雨に零れ石畳
廃校を囲む老木花万葉
雨後の園光る地面へ飛花落花
たらの芽の句をいただき指の刺

横浜 佐藤 勝代